

意見 陳述書

原告 刀禰 詩織 氏

原告 アーサー・ビナード氏



模擬法廷の様子

原告

刀禰 詩織 氏



1 私は、福岡県の福津市で5才の娘と暮らしています。東京で3.11をむかえ、実家のある福津市に避難してきたから、早2年の月日が流れました。

結婚を機に、それまで勤めていた新聞社を退職し、上京しました。

夫は都内の金融機関に勤めており、夫との間には娘にも恵まれました。娘には、好きだったエーリヒ・ケストナーの本から、「点子」と名付けました。

夫とは、都内にマンションを購入する話もしていました。

2 震災の当日、私は西荻窪の自宅にいました。

一番狭い場所がより安全かと思い、風呂場に駆け込むと、風呂場の水が揺れて飛び散り、足にかかりました。床がきしみ、本棚が崩れ、食器が落ちるのが見えました。築50年以上の、壁にヒビも入ったマンションだったので、倒壊すると思いました。「生かしてください、まだやらなければいけないことがあるんです」と何度も何かをお願いしました。

大きな揺れが収まると、保育園に預けていた娘の安否が気になり、余震が続く中、自転車をこぎました。二階建ての保育園にしなければ良かった、つぶれていたらどうしようと、そればかりが心配で、保育園に着き、防災頭巾をかぶって笑っている娘の姿を見たときには、安堵で泣いてしまいました。夫は交通マヒのため深夜まで帰らなかったため、娘を連れて近くの小学校に避難し、そこで一夜を過ごしました。

3 翌日のニュースでは、津波の影響で、福島第一原発に問題が生じていることを知りましたが、特に気に留めませんでした。けれど3月12日、福島第一原発の1号炉で

爆発があり、翌日の新聞から、関東地方にも放射性物質が飛んでくる可能性があることを知ったとき、血の気が引きました。

私は、学生時代、チェルノブイリを撮り続けているフォトジャーナリストの広河隆一さんに憧れていて、新聞記者になってからは、チェルノブイリ原発事故で被害にあった子どもたちを支援する団体取材したこともあり、被ばくした子どもたちが、未だに白血病や甲状腺がん、奇形といった様々な障害に苦しんでいることは、多少なりとも知っていました。

このままでは娘も被ばくしてしまうと思い、夫に、娘を連れて逃げたいと言いました。夫は過剰反応だと言い、たとえ被ばくしても、人は運命を受け入れるべきだと言いました。豊かな都会生活を謳歌してきた自分に関してはそうかもしれないと思いました。でも、生まれてまだ2年の娘もその運命を受け入れさせるべきなのかどうか、私には判断がつきませんでした。

3月14日のことでした。

勤め先ではみんな、何もしないのも落ち着かないため、とにかく手を動かしているような感じでした。節電のために電気はすべて切り、ラジオだけが流れていました。突然、緊急速報が流れ、「福島第一原子力発電所の3号炉が爆発しました」「福島第一原子力発電所の3号炉が爆発しました」と繰り返されました。

誰かが「終わった」と呟きました。上司は福島出身で、実家とはまだ連絡がとれていませんでした。みんな呆然と宙を見ていたとき突然、その上司が私のほうを向いて言いました。「僕はここに責任があるし、どこにも行くところがないけど、君は、本当にここにいていいのか?」。その一言が、私の背中を押してくれました。「ごめんなさい。やめさせてください」。私は勤め先を飛び出し、娘を迎えに行く途中、夫に電話して「点ちゃんを連れて逃げるから。」と結論だけ伝えました。

保育園に行って、娘に帰り支度をさせていると、ほかの子どもたちがやってきて、不安そうに「どうしてもう帰るの?」

TOPIX

6.5 全九州統一行動に参加



6月5日 川内原発・玄海原発再稼働阻止!全九州統一行動に参加、要請しました

この日の行動には「脱原発ネットワーク・九州代表」「九電消費者株主の会」「電力労働者九州連絡会議」「原発なしで暮らしたい・水俣」「さよなら原発佐賀連絡会」など、九州各地のさまざまな反脱原発団体から約70人が参加しました。



まず、「電力労働者九州連絡会議」が要請書を提出、「原発なくそう!九州玄海訴訟 風船プロジェクト実行委員会」は2番手でした。その後、「脱原発ネットワーク・九州代表」「九電消費者株主の会」が事前に提出していた「公開質問状」に対し、九電が回答しましたが、回答が不十分なので再質問が始まりました。

今年2月に文部科学大臣を本部長とする政府の地震調査研究会推進本部が、九電が行った川内原発近辺の活断層評価について「とにかくひどいものである」とし、調査・再評価を求めています。このことについての九電の見解は「解釈の違い」というものでした。このあたりから、怒号の嵐となりました。九電の回答、不誠実な態度に対し、予定は13時~15時までの2時間でしたが、結局終わったのは16時半ごろでした。

風船プロジェクト 第3弾のご案内



「原発なくそう!九州川内訴訟」団のみなさんと同日同時刻にリリースします!

万が一、玄海原発で過酷事故が発生した場合、放射性物質はどのように飛散するのでしょうか?私たち市民の手による風向きの「見える化」に挑戦する「風船プロジェクト」第3弾を実施します。今回も1000個の風船に「原発なくそう!」の想いを乗せて大空に放ちます!

日時: 7月28日(日) **少雨決行!**

12:30~ 受付

13:30 スタート

14:30 風船とぼし

場所: 波戸岬海浜公園海のトリム
(鎮西町波戸720-1)

参加費: 大人 500円
高校生以下 無料

※エコロヴィー風船と紙風船、メッセージカードは国産竹パルプ100%紙を使用。できる限り環境に配慮します。

※原告の方もそうでない方もどなたでもご参加いただけます。

●地域原告の会がかき氷や冷たい飲み物の販売など出店を計画中。

●福岡市天神など複数の地域から貸切バスを運行予定。詳細はお問合せください

●カンパのお願い(1口1000円~)

西日本シティ銀行前原(まえばる)支店

普通口座 1815643

加入者名 風船プロジェクト 代表 柳原憲文
(フウセンプロジェクト ダイヒョウ ヤナギハラノリフミ)

●最新情報はホームページで

<http://genkai-balloonpro.jimdo.com/>
facebook、twitter もあるよ!

TOPIX

5.31 第5回口頭弁論

現在、伊方原発と川内原発で再稼働が狙われていますが、その次は玄海原発と言われています。こうした中で私たちは5月31日、第5回口頭弁論をむかえました。「今こそ、再稼働反対の思いを示さなければ!」との思いで、前回は大きく上回る300人が佐賀地裁にかけつけました。法廷開始前に佐賀県庁前を通るアピールウォークを行い、佐賀県知事にも訴えました。

法廷では、東京から福岡に避難している刀禰詩織さん、アメリカ人で詩人のアーサー・ピナードさんが意見陳述を行いました。刀禰さんは泣きながら意見陳述をしたそうです。終わって、法廷に入っていた原告の方が「傍聴していた九電職員も泣いていたようにみえた」と話していたのを聞きました。

同じ時間、佐賀県立美術館ホールで模擬法廷が行われました。裁判長は前田憲徳弁護士、糸島と福岡南の原告の方が裁判長の両隣の裁判官役をつとめました。原告代理人役の紫藤拓也弁護士、小出真美弁護士、後藤富和弁護士が弁護団が提出した書面について説明しました。



後藤弁護士は3枚のパネルを準備、原発がなくても電気は足りること、原発のコストは馬鹿高く原発に経済性はないことなどを主張しました。

報告集会では、アーサー・ピナードさんのミニ講演や風船プロジェクト第2弾の報告が行われました。最後に北九州地域原告団の「原発いらない!」の思いを込めた歌が披露され、これまでで最高の盛り上がりの中で第5回期日を終わりました。



6.2 NO NUKES DAYに参加

6月2日、東京・明治公園で「原発ゼロをめざす中央集会」が行われ、全国から18000人が参加しました。「原発なくそう!九州玄海訴訟」原告弁護団も参加、板井優弁護士がリレートークで発言、「原発から自由になるために一緒にがんばりましょう!」と力強く訴えました。

集会後は都内をアピールウォーク。アピールウォークに赤ちゃんの手を振りかえすパパさん、ピースサインでこたえる母娘、一緒にコールする若者…「2年前と雰囲気違う!」という声を聞きました。

その後の国会包囲には6万人が参加しました。



と聞いてきました。地震の影響で、親御さんたちのお迎えが遅くなったりして、子どもたちなりに不安だったと思います。それ以上、不安にさせたくなくて、「用事があるの」と嘘をつきました。ここで生まれ育ち、兄弟のように育てた子どもたちをここに置いて逃げることは、引き裂かれるような思いでした。本当はみんなを連れて逃げたかったのです、本当に。娘を自転車に乗せ、一つしかないマスクをつけさせて、自転車をこぎだしました。見慣れた景色が、なんだか別のもののように思いました。この空気にももう放射能は混じっているのかなと、そんなことを考えていました。

荷造りのため自宅に戻りました。子どもの服を詰めた段ボールをいくつか実家に送り、金魚を近くの池に逃がすと、娘には、ご機嫌で外出してもらえよう、お気に入りのピンクのドレスを着せました。中央線で東京駅に向かい、新幹線に飛び乗りました。自由席は埋まっていて、通路には私と同じように大きな荷物を持った子ども連れのお母さんたちが何組か座っていました。お互いに、声をかけることはしませんでした。意識はしていたと思います。新幹線の中では、涙がポロポロこぼれました。大切な人間関係すべてを、私は東京に残し、裏切ってしまった、失ってしまったと思いました。

大阪駅を過ぎたあたりで、もう大丈夫かもしれないと少し安堵しました。小倉駅から在来線に乗り換え、東福岡駅に着いたときには、既に夜10時を回っていました。

駅のホームに降り立つと、改札口の向こうに両親の姿が見えました。母は、私たち親子の姿を見て、戸惑っていたそうです。私の眼鏡のフレームは折れ、娘のピンクのドレスは薄汚れていましたから。私は母の顔を見て、それまで抑えていた感情が一気に溢れ出しました。よくは覚えていないのですが、東福岡の駅前で、私は「みんなを捨ててきてしまった!」「友達を捨ててきた!」「保育園の子どもたちを捨てて自分だけ逃げてきた!」と大声で泣き叫んだとのこと。

4 その翌日(3月15日)、私が東京に残してきた大切な人たちの上に、ヨウ素やセシウムなどの放射性物質が降り注ぎました。

特に、半減期が短く、その分、強い放射線を発するヨウ素は、子どもたちの身体に深刻な影響を与えます。しかし、そのような深刻な事態を、国も、マスコミも、全く伝えようとしませんでした。みんなは、何も知らされないまま、大量の放射性物質を浴びたのです。

5 実家に戻った私は、何かに憑りつかれたようにパソコンにしがみつき、原発の情報を集めました。東京に残してきた夫や友人たち、子どもをもつ多くの人たちに、一日でも早く避難してもらわないといけないと思い、情報を送り、電話しました。東京にいるみんなも、放射能に脅えていま

した。「もう子ども産めないかも」と言う友達もいました。でも、みんなにはみんなの事情があって、東京から離れられないようでした。避難できないのに、情報だけ伝えても恐怖をあおるだけだとわかり、途中でやめました。

こんな大変なことが起きたのだから、各地で原発反対のデモが起きるだろうと思っていたら、皆無でした。何かしなければと思い立ち、私は「一緒にデモをしませんか?」というピラを作り、福岡市最大の市街地である天神の街頭で、大声で人に呼びかけ、娘と一緒にピラを配りました。それを機に、福岡に母子避難している人たちとの出会いが重なり、『ママは原発いりません』というネットワークも立ち上げました。

福岡には、福島からの避難ママもいましたが、関東からの避難ママのほうが多くいました。福島からの避難ママたちは、実家も親戚も、生まれ育った土地も失い、本当に多くを失い、悲しみと恐怖のどん底にいました。彼らに比べたら私たちなんて、いつも思っていました。今思うと私たち関東からの避難組は、彼女たちとは少し違う意味で苦しんでいたかもしれません。

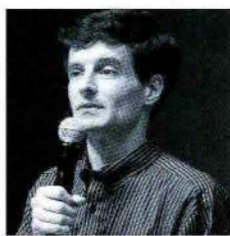
東京から避難してきたと言うと驚かれることも多く、本当に避難するほどのことなのか、どうせ夫と離れたかったからじゃないのかなど、いろいろな目で見られていることは、言動の端々からいつも感じました。そういう人たち自身、東京や東北などで子育てする子どもがいたりして、私の避難を認めてしまうと、自分たちの子どもの判断を否定されてしまうような苦しさがあったのだと思います。だから、地元の人たちとはなるべく会わないようにして、もっぱら避難ママたちと付き合っていました。

また、私の場合は両親からは理解してもらえたことで助かりましたが、夫から仕送りを切られたり、離婚を脅されたりして、危険と思いつつ、泣く泣く関東へ帰っていく避難ママたちもいて、そういう別れにはつらいものがありました。私自身、夫に何度も帰ってくるよう求められました。戻りたい気持ちもありましたが、やはり東北の食材に頼る関東で子育てをする自信がもてないまま一年が過ぎ、とうとう夫から離婚を切り出され、夫にも新しい人生を歩んでもらうべきかと考え、離婚を決断しました。夫は、転職して福岡に来ることもできたのですが、それではキャリアにならないと感じたようです。

夫は仕事を選び、私は娘の健康を選びました。その選択が本当によかったのかどうか、いまだにわかりません。娘が父親に会いたいと泣くたびに、胸がしめつけられます。父親のいない子どもが心にどんな傷を抱えて育つのか、私にはわかりません。その責任を、私は一生、負い続けるのだと思っています。せめて二ヶ月に一度は二人を会わせられるよう、努力を続けています。

6 起きてしまったことについて、あれこれ言う気持ちはも

うありません。今は、仕事を探し、子どもを養い、前を向いて生きていこうとしています。けれど、もうこれ以上逃げる人生は歩みたくありませんし、他の人にも経験してもらいたくありません。何より、福島の子どもたちに甲状腺異常が多発している今、私たちのとる選択は一つしかないと思います。再稼働したくてたまらない経済界、そこに支えられた政界の力は強大です。ですが、どうか法律の世界だけは、彼らの一員ではありませんように。子どもを安全な環境で育てたいという、母親のささやかな願いが受け取ってもらえる場であることを切に祈ります。



□ 原告

アーサー・ビナード氏

〈詩人 絵本「ここが家だ—ベン・シャーンの第五福竜丸」著者〉

1 私はアメリカ合衆国の、ミシガン州に生まれ育ち、高校生のころから、英語で詩を書き始め、大学では英米文学を専攻しました。四年生のときに、ひょんなことで日本語に出会い、平仮名と片仮名と漢字に魅了され、日本語の豊かな響きにひき込まれました。卒業と同時に来日し、それから23年間、人生の半分をこの列島で、日本語と向き合いながら過ごしたことになります。私の世界の見方は、日本語を習得することで大きく変わりました。中でもとりわけ大きく変化したのは「原子爆弾」と「原子力発電」の捉え方でした。

2 「原爆」と「原発」は、同じ核分裂の連鎖反応を用いて同じ放射性物質を作り出します。当たり前のことですが、私にとって、広島の人々が生み出した日本語が、その同一性を理解するきっかけとなりました。原爆と原発が同じ根っこであるという大事な視点をぜひこの裁判でも生かし、本質を表す言葉で玄海原発の問題を捉え、考察していただきたいと思い、意見を述べます。

3 私はアメリカの教育の中で「原爆投下は必要だった」と繰り返し教えられてきました。その定説を、私は完全に信じ込んでいたわけではありませんが、否定するだけの視野もありませんでした。当時の私は「原子爆弾」のもとになった Atomic Bomb と「核兵器」と訳された Nuclear Weapon という、そんな表現しか知らなかったのです。

4 日本に来て数年が経ってから、私は広島を訪れました。

平和記念資料館では、1945年8月6日、核分裂の連鎖反応にさらされた人の話を初めて聴きましたが、その女性は、「原子爆弾」や「原爆」ではなく、「核兵器」という言葉も使いませんでした。彼女は広島の上空で引き起こされた現象を「ピカドン」と呼んだのです。私にとっては、ついで聞いたことのない単語でした。けれど、その意味は瞬時に伝わってきたのです。

広島で覚えた「ピカドン」を私は自分で使ってみて、立ち位置が変わることを実感しました。「Nuclear Weapon」も「核兵器」も「Atomic Bomb」も「原子爆弾」も、核開発を進めた人たちが作った呼び名です。落とす側、核分裂を利用する側の視点と都合が最初から組み込まれています。他人事として捉える言葉で、たとえば「エノラゲイ」の爆撃機からキノコ雲を見下ろす印象です。それに対して「ピカドン」は広島的生活者が、自らの焼かれた皮膚とわずたずに切られたDNAをもとに、日本語を鋭く豊かに響かせて、生きた言語感覚で本質をつかんだのです。3日後、異なる核分裂性物質のプルトニウム 239 が長崎の生活を奪ったときには、「ピカドン」という名称はすでにあったといえます。

英語にない「ピカドン」を使うと、私たちは、67年前の広島に、長崎に立たされます。言葉の選択一つで、私たちは実態を正確につかみ、視点を変えることができるのです。

5 それと同時に、広島「ピカ」と長崎「ピカ」の意味の違い、つまり広島ウラン 235 と長崎プルトニウム 239 を冷静に捉えれば、この玄海原発差止めの裁判で何が問われているのか、自覚することになると思います。ウラン 235 は、自然界で唯一とれる核分裂性物質ですが、鉱山から掘り出したウラン鉱石は 99% 以上が核分裂しないウラン 238 です。核開発も原子力開発も、ウラン 238 を捨てて 235 を残す「ウラン濃縮」と呼ばれる作業から始まります。ところが2種類のウランを使えば、自然界に存在しないプルトニウム 239 を人工的に作ることも可能です。

ウラン 235 の核分裂から出る中性子をウラン 238 の核に当てると、分裂しない代わりにウラン 238 は、凄まじい核分裂を起こすプルトニウム 239 に変身します。問題は、ウランが爆発するとプルトニウムも広範囲に散って集めることができません。どうやって爆発を伴わない原爆で、より凄まじい原爆の原料を量産するかが、マンハッタン計画の最大の課題でした。

「ドン」を抜いた「ピカドン」、「爆発」抜きの「原子爆弾」として開発されたのが「原子炉」という装置。1942年に組み立てられ、ウランの核分裂によるプルトニウム作りが2年と8ヵ月ずつと行われ、1945年8月9日に長崎で引き起こされた大量虐殺は、「原子炉」の本質、そもその成

り立ちなのです。ただし「原子炉」と呼ばれるようになったのは原爆投下よりずっとあとのこと。

「ピカドン」に対し、同じ核分裂を「ドン」抜きにゆっくりやる装置を、本当は「ジリジリ」と呼べば、わかりやすいと思います。あるいは素直に「プルトニウム作り機」と言っても本質が伝わるはず。しかし「原子炉」という言葉に偽装されて、「発電機」として売り込まれ、この日本列島にも50基以上、設置されました。たしかに、湯沸し機能をつけてタービンを回し、発電しているのは事実です。けれど突き詰めれば、その電力はカモフラージュにすぎず、原発は核開発利権の維持のために存在するのです。

6 プルトニウムは「発電」の名の下に、「原子炉」の中でジリジリと作られます。長崎と広島に黒い雨として降った核分裂片も、大量に生み出されます。たとえ施設内で安全管理の下で核分裂を起こしていても、プルトニウムの半減期は2万4千年。人間の英知をはるかに超えた時間軸で、環境に漏れ出さないよう管理することはできません。政府と電力業界はそんな物質を「使用済み燃料」と呼び

ますが、燃焼しないものなので「燃料」ではないし、生き物の被曝は続きますから「済み」も現実と異なります。

7 私は詩人として、日本語の素晴らしい道具箱を毎日使っています。裁判に携わる弁護士も裁判官もみな、言葉を使って現実を捉え、それを表現しようとします。私たちの日本語が、ものごとの実態とつながっていれば、法律の営みも文学も営みも成り立ちます。しかし言葉が現実とかみ合わない、ペテンの道具に成り下がっている現在、まともな詩作品も、まともな判決も、世に出せない危機的状況に陥るのではないのでしょうか。

8 私は、ペテンを見抜いて言葉を紡ぎたいと思います。玄海原発の裁判で問われていることは、この地で、長崎のピカドンの原料作りをジリジリと続けるべきかどうかです。日本語が生き残れるかどうか、司法と文学に携わる者の、言葉の選択にかかっていると思います。



ブックレット

「原発を廃炉に! 1万人原告の挑戦 PART 2」

が好評です。

裁判のこれまでと今後がよくわかる!
ブックレット好評発売中!

◆ 目次

はじめに— 原告一万人をのりこえて	原告団長 長谷川 照
原発がもたらす被害とは何か	弁護士 板井 優
原発の安全性とは「国の基準を守ること」ではない	弁護士 馬奈木昭雄
原発を廃炉にする闘いの方向	弁護士 板井 優
訴訟の経過	弁護士 長戸 和光
市民の力で脱原発を!	
I. 原告の力による「風船プロジェクト」実施	弁護士 岡部 史卓
II. 裁判傍聴のススめ—模擬法廷の活用	弁護士 後藤 富和
III. 電気料金値上げ問題の真相	弁護士 毛利 倫
などなど・・・	

一冊1000円です。事務局または弁護団の弁護士が所属するお近くの弁護士事務所で取り扱っています。ご購入をご希望の方はご連絡ください。書店での注文も可能です。

◎ブックレットを読みました。私たちが戦っている裁判がいかなる壮大な意味と展望を持って進められているかがよく分かります。「名もない自分がなんで原告に?」などという素朴な控えめな方に、伝えたい内容が詰まっていますね。広めたいです。
(福岡市早良区・増田忠さん)

◎66ページから67ページにかけての馬奈木弁護士の文章の中の一節が、最も心に残っている。はじめの頃の大雪の中の学習会でも話していたこと。「水俣病は、加害者であるチッソが国の基準に違反する工場排水を流したからおきたのではない。国の飲料水の基準にも適合する排水から水俣病はおこった。カネミ油症も同じ。加害者は被害発生を「想定できなかった」といつのる」(福岡県粕屋郡・男性)

◎ブックレットの第2弾読んでみた。これ、原告以外の人にも読んでもらいたいよね。これ読んだら初歩的な事から色々な問題まで統括して書いてあるから分かりやすいと思った。原告じゃない人にこそ、読んでほしいね。そして、原告になってほしいね。これ読んだら原告になるよ。被害調査は誰が書いた? なかなか、やるね～本の内容も小出しに広めていけば良いかな～って思った。そしたら、本も読みたいって人が増えるかな＝原告になる。(福岡県大野城市・女性)